

# ”芳一ばなし”から「耳なし芳一のはなし」へ

宮 田 尚

## 1 はじめに

芳一は、亡霊に耳を引きちぎられた。

亡霊の禍からのがれるために、阿弥陀寺の和尚は芳一の身体中に般若心経を書き付けたのだが、耳にだけ書き落としてしまったからだ。

いつも通りに芳一を迎えに来た亡霊は、般若心経のために芳一の姿が見えなくなっていることを怒り、闇の中に浮かんでいる耳を、不在の証として持って帰ることにした。

けっして声を出すなどの和尚に指示したがって、必死に痛みに耐える芳一。引きちぎった耳を持って遠ざかっていく亡霊の、甲冑を鎧うているらしい重々しい足音。沈黙の世界と音の世界とが交錯する芳一ばなしのクライマックスだ。

\*

小泉八雲の「耳なし芳一のはなし」は、あたかも独立した作品であるかのように、『怪談』所収各話の中では、突出して一人歩きし

ている。

それはなによりも、亡霊に耳を引きちぎられるという意表をつく設定の、強烈なインパクトによるところが大きいだろう。

加えて、平家滅亡、安徳幼帝の入水という、誰もが知っている歴史の悲劇を背景とすることも、この話を後押ししているだろう。時人も人も、そして場所も絞り込まれているために、読者はイメージを具体化しやすい。親近感も湧く。

芳一ばなしの舞台である阿弥陀寺（現・赤間神宮）の境内には、芳一堂がある。そこには、琵琶を抱えてうそぶく芳一の、写実的な木像（押田政夫作）が安置されている。芳一堂の建立は昭和三十三年（1957）だから日はまだ浅いが、平家一門の墓の前に位置していることでもあり、ここを訪れる観光客の多くは、古くからあるものだと思込んでいるようだ。扁額の揮毫が、この年の二月に首相になった岸信介であることに気付く観光客はほとんどいない。

赤間神宮では、例年、七月十五日に芳一まつりを行っている。平

成十五年(2003)の芳一まつりでは、筑前琵琶奏者の上原まりが、新作の「耳なし芳一」を奉納した。後に、これは同じ『怪談』の「雪女」とともに、CDに収められた。

\*

「耳なし芳一のはなし」には、名誉欲、保身、裏切り、怨念、怒り等のモチーフが絡み合っていて、恐怖の世界を現出している。基本的には名人讚美譚だとみなすべきだろうが、般若心経の靈驗譚でもあるし、致富譚でもある。

大方の読者は、巡ってきた千載一遇の機会を逃すまいとする芳一の立場に心を寄せ、彼と恐怖感を共有しながらこの話を読むことだろう。なかには、耳の喪失という犠牲の代償として富と名誉を得た芳一に、実生活で思うに任せない自分自身を重ね合わせてみる読者もあるかもしれない。

芳一は、人間が本質的に持っている弱さ、愚かしさと、人々が希求する強さとを合わせ持っている。読者にとって彼は、同情の対象であると同時に、羨望の対象でもあろう。

\*

ところで、どうやらわたしは小泉八雲に歓迎されない読者のようだ。この作品の問題点が気になってしかたがない。感情移入どころではないのだ。

わたしは、こんな風に思う。

平家の亡霊は、はたして壇浦合戦の段(なるものが仮にあるとし

て)を聞いたがるだろうか。もし聞いたとしても、亡霊は芳一の耳を引きちぎりはしなかっただろう。芳一は「耳あり」のままで、裕福になったはずだ。

芳一が「耳なし」になったのは、ひとえに阿弥陀寺の和尚の無知と誤解による。小泉八雲は和尚の無知と誤解を修正するどころか、それを増幅拡大してしまった。

もっとも、帰化したばかりで日本語も不自由だし、日本文化にも疎い八雲にその責任を求めることはできない。混乱の根源は、知ってか知らずでか、無知な和尚を登場させて亡霊ばなしを構成し、八雲を誤った方向に導いた原話(『臥遊奇談』)の作者と、怪異譚を好んだその時代に求めなければなるまい。

それにしても、いわゆる”芳一ばなし”の流布の状況は、地域も広く時間も長い。これはあるいは、琵琶法師のグループが自派の宣伝用にはらまいた、いわばCMだったのではないか。

以下は、日本の古典文学、ことに説話や軍記と付き合ってきた立場からの、野次馬的所見である。

## 2 「さるやんごとないお方」とは誰か

「耳なし芳一のはなし」を読んでまず気になるのは、芳一を呼び寄せて彼の語りを聞こうとした「さるやんごとないお方」とは誰なのか、という点だ。

作品理解の根幹に関わることなので、この点から確認しておきた

い。

結論からいえば、これは安徳帝だと察せられる。理由は、次の通りだ。

- ① 「やんごとないお方」と呼ばれていること。
- ② 都から、大勢の随行者を引き連れて来ていること。
- ③ 随行者の中には、高位の人のほかに女性も多数いること。
- ④ 「やんごとないお方」の代弁をする重要な立場に老女がいること。

⑤ 芳一が壇浦合戦での先帝入水の場面を語ったとき、聞いている人々の間から苦悶の声や、激しい嗚咽の声があがったこと。

⑥ 寺男たちが芳一を探し当てたとき、彼は安徳帝の陵の前に端座して平曲を語っていたこと。

芳一に壇浦合戦の段を語るように指示するとともに、語り終えた後「わが君にも大のご満悦」と、「やんごとないお方」の感想を伝えた老女は、二位尼時子であろう。彼女は、安徳帝の母方の祖母。

壇浦合戦では、八歳の安徳帝を抱いて入水した。当時の推定年齢は六十歳前後だ。

安徳帝の亡骸は阿弥陀寺の陵に葬られているものの、魂は故郷の京に戻っていた。それがこの度、ゆえあってお忍びでこの地を訪れた。こうした設定であることは、ほぼ動かないだろう。

### 3 亡霊の目的は？

次なる疑問は、平家の亡霊、それも安徳帝の霊が芳一を呼んで壇浦合戦の段を聞こうとしたのは何のためなのか、という点だ。これは理解に苦しむ。

壇浦合戦の段を語るように指示した老女は、その理由を「あの段は、平家のうちにも、いちだんと哀れの深きくだりじゃほどに」という。

本人がそう所望しているのだから、額面通りに受け取るほかない、という立場もあるだろう。

しかし、わたしにはこの点は腑に落ちない。

安徳帝とその周辺の人々にとって、壇浦合戦の悲惨な状況、ことに入水の場面は、はたして再現してみたい場面なのだろうか。

古いアルバムをひもといて、若き日の追憶に浸るといふ状況ではない。天折した逆縁の子の面影を追う親の立場とも、もちろん違ふ。安徳帝とその周辺の人々にとっては反芻したいどころか、むしろ、出来れば事件の現場に近づきたくないし、思い出さたくもない場面のはずだ。

平家ゆかりの人物でも、中心から遠く離れた周縁部の人物なら、あるいは「いちだんと哀れの深きくだり」だと評価することもあるかもしれない。けれども、ここはなにぶんにも中枢の発言なのだ。違和感は拭いきれない。

#### 4 『平家物語』の立場

そもそも、平曲、あるいは『平家物語』は、平家一門にとって歓迎すべきジャンルではない。挽歌ではないのだ。

平曲や『平家物語』の根底にあるのは、清盛によって代表される平家一門への批判、ないしは、滅びるべくして滅びたという突き放した姿勢だ。

たしかに、『平家物語』には滅び行くものへの哀惜の情が点在する。そのような情緒的な面があることは否定できないけれども、それはけっして作品の本質ではない。『平家物語』は平家一門に寄り添ったり、親近感を抱いたりする作品ではないのだ。

『平家物語』の主眼は、権力の自壊作用による滅びの確認にある。そのことは、序章に明確に示されている。

すなわち、序章は「諸行無常」「盛者必衰」との、作品を貫く世界観を提示したうえで、その例証として、強大な力を誇りながら、程なく滅びた権力者たちの名を掲げる、という構造になっている。

ここで見落としてならないのは、滅びに至る理由が示されていることだ。ややもすれば、「盛者必衰」は、滅びそうにない権力者でも、しょせん、やがては滅びるのだと解釈されがちだ。だが、それは違う。『平家物語』の作者は、そのように達観しているのではない。達観しているのなら、滅びの理由を示すまでもない。

秦の趙高や漢の王莽等は、「旧主先皇の政にもしたがはず、楽しみをきはめ、諫をも思ひいれず、天下の乱れむ事をさとらずして、

民間の愁ふる所を知らざりしかば」、つまり、このような抜き差しならない状況を作り出していたために、「久しからずして」滅亡に至ったというのが作者の立場だ。

滅びにはしかるべき原因があったことを、それも権力者が奢りの中で、自らが作り出した原因があったことを、序章は指摘しているのだ。

重ねていう。すべての権力が、そのまま無条件に滅亡に直結するというのではない。「諸行無常」、すべてのものはけっきよくは滅びてしまうものだとの認識に立った上で、『平家物語』の作者は過程を重視している。権力が滅びの因を醸成し、その結果滅びるのであることを、別のいい方をすると、権力になかば必然的に内在する腐敗の構造を問題視し、それを指摘しているのだ。「盛者必衰」は〈盛者デモ必ズ衰エル〉ではない。〈盛者ハ必ズ衰エル〉なのだ。

この論理は、そのまま清盛にも適用される。「伝へ承るこそ、心も詞も及ばね」との発言は、滅亡の因となる所行の数々が清盛にあったことの指摘にほかならない。

『平家物語』は、想像を絶するその所行を――、直接間接平家の滅亡をうながした事例の数々を、具体的に示すことに向けて用意された、いわば告発の書なのだ。

『平家物語』の実態がこのようなものである以上、平家一門の結束の要である安徳帝や、とりわけ清盛の妻である二位尼時子の亡霊が、自らの意思で、すすんで壇浦合戦の段の語りを聞こうとすると

は考えにくい。「あの段は、平家のうちにも、いちだんと哀れの深きくだりじゃほどに」などと、他人事のように、暢気なことを言うとはとうてい考えられないのだ。

## 5 二位尼の意思

源平の合戦の本質は、後白河院と清盛とによる王権をめぐる争いだ。武器を交えたのは源平両軍だけれど、それは現象面のことにすぎない。

二位尼時子は、志なかばで他界した夫清盛の遺志を継いで、後白河院への対立を貫き通した。その結果が、壇浦での入水であった。

平家一門の中でおそらく最年長だった彼女が、誰にも任さず、安徳帝と、三種の神器の内ふたつ、すなわち宝剣と神璽を伴って入水したのは、王権を絶対に後白河院に渡さないとの、強い意思のあらわれにほかならない。壇浦での入水は、きりきりと胸の痛む、憤怒の場面であったはずなのだ。

## 6 亡霊の本心

もっとも、相手はなにしろ亡霊だ。つねに本心を口にするとに限らない。「あの段は、平家のうちにも、いちだんと哀れの深きくだりじゃほどに」との発言は、じつは芳一に安心して語らせるための口実だったかもしれない。

ほんとうのねらいは、平家に批判的な内容を持つ平曲、あるいは

『平家物語』の実態を確認し、そのようなものを語ることをなりわいとす芳一ら琵琶法師に制裁を加え、そのことによって、後世の平家批判に歯止めをかけようとしているのではないか。

こうした可能性についても、いちおう考えておかなくてはなるまい。

しかし、結論からいえば、その可能性はないとみてよいだろう。たとえば第一に、亡霊たちは芳一の語りを聞いて、つぎの夜も、そのつぎの夜も、語りを聞きたいと希望している。そして第二に、語りに感激して、「じゅうぶんなる礼物」を与えると表明している。

批判の実態の確認なら、一晚で十分だ。謝礼で芳一の心をくすぐってまで、連夜誘い出すことはない。

## 7 和尚の無知と誤解

第三の疑問は、阿弥陀寺の和尚の反応だ。これも理解に苦しむ。

夜な夜な芳一を誘い出しているのが平家の亡霊だと察知した和尚は、「二どと亡者の申すことをきけば、そなたの身はついには八つ裂きに会うてしもうぞよ。いや、いずれ遅かれ早かれ、その身はとり殺さるるにきまっておる」という。なぜそのように判断したのか。

説話や軍記に親しんでいる者の立場からすると、和尚のこの判断はとうてい信じがたい。

芳一は、亡霊に求められて壇浦合戦の段を語ったのだ。拒否した

のではない。なのに、なぜ取り殺されなければならないのか。八つ裂きにされなければならないのか。

中古、中世にも、生者に危害を加えた亡霊はいた。亡霊の祟りにおののく人もいた。

だが、亡霊の祟りはピンポイントで行われる。恨みを残して死んで行かざるを得ないように仕組んだ者に対してだけ、報復として亡霊は祟る。見境もなく、無差別に、手当たり次第に祟るなどという無節操なことはしない。これが伝統的な亡霊の世界の約束ごとだ。亡霊の名誉のために言っておくが、これははっきりしている。

たとえば、菅原道真が天神になったとして、その祟りを恐れたのは彼を太宰府に左遷した藤原時平と、その周辺の人物に限られる。

『平家物語』の例でもそうだ。建礼門院の無事な出産を願って清盛が禍を取り除こうとしたのは、崇徳院、藤原頼長、新大納言成親、西光、成経らだ。彼等はいずれも、直接間接、清盛が掣肘を加えた人物ばかりだ。祟りがあるとすれば彼等の霊だと、清盛が考えていたことを示している。

夫に捨てられた妻、上司や同僚に裏切られた男など、有名無名取り混せて、祟りをなす亡霊は『今昔物語集』の中にいくつも求められる。しかし、祟りの対象となるのは、つねに当の相手に限られる。

亡霊の問題は、それだけにとどまらない。

亡霊は祟りをなすどころか、恩を受けた人物に対しては、恩返し

をする。これも伝統的な亡霊の世界での秩序だ。祟りと報恩とは表裏の関係にある。

たとえば、元興寺の道登の場合（『靈異記』上12・『今昔物語集』十九31）はこうだ。

奈良坂山で、道行く人が知らずに踏んで通り過ぎていた鬮體があることに気付いた道登が、従者を呼んでそれを木の上に置かせたところ、従者のもとに未知の客が訪れて謝辞を述べ、亡霊の生家に招待して馳走したという。祖霊来訪の日を待って亡霊が蘇り、恩を報じたのだ。

恩返しをするのは亡霊だけではない。生霊も恩を報じている（『今昔物語集』二十七20）。

事を分けて話せばわかるのも亡霊だ。没後も自らの普請した家に留まっていた河原院左大臣の亡霊は、今の持ち主である宇陀院に、正当な手続きで入手したものであることを告げられて消え、ふたたび現れることはなかった（『今昔物語集』二十七2）。宇陀院の説明に耳を傾け、納得している。

能の世界には、祟るどころか、自らが亡霊だと名乗ることを遠慮する気の弱い亡霊（『頼政』）や、往生への障碍を取り除いてもらったことを生者に感謝する亡霊も登場する（『清経』『卒塔婆小町』など）。

亡霊の報恩譚は近世にもある。たとえば『古今奇談翁草』所収の「靈魂報恩」（一2）は、さきの道登の場合と同じように、放置され

たままになっている鬻腹の苦悩を救った主人公が異能を得たはなしだ。ちなみに、この『古今奇談翁草』はヘルン文庫に入っている。小泉八雲がふれた可能性のある作品、文字どおり、手の届くところにあった作品である。

さて芳一が平家の亡霊に呼ばれて平曲を語っていると察知した阿弥陀寺の和尚は、「そなたの身はついには八つ裂きに会うてしもうぞよ」といった。僧にはあるまじき反応だ。亡霊への知識がなさ過ぎる。

亡霊に呼び出されて平曲を語っていると知った彼がなすべきことは、功德を施したと芳一をたたえることだ。そして、亡霊への供養をすることだ。

迷える亡者を救済するのは、仏教者の勤めだ。生者を護ることも必要だが、なかば反射的に亡霊を悪だと認識し、それを排除しようと反応するのは宗教的風土になじまない。これは日本だけにかぎったことではない。仏教国ならどこでも同じことだ。

阿弥陀寺の和尚の反応は、伝統的な宗教風土から逸脱している。

## 8 八雲的屈折

「耳なし芳一のはなし」には典拠があった。すでに指摘されているように、『臥遊奇談』（一夕散人著 天明二刊 1782）巻二所収の「琵琶秘曲泣幽霊」である。

小泉八雲の使用した『臥遊奇談』が、富山大学のヘルン文庫に収

められている。そしてありがたいことに、蔵書印の朱色も鮮やかなカラー写真で、ネットに公開されている。

あくまでも、その写真からの所見なのだが、縹色の表紙は変色し、ひび割れも認められる。五分冊ともに題簽が擦り切れている。

かなり疲労がすすんでいるようだ。出版されてから八雲の手に渡るまでに百年以上経っていることでもあり、この間に、そうとう読まれていたらしい。どの段階でか、篠崎氏の所有にかかっていたことが、書き込みでわかる。

本文の保存状態は、表紙の痛み具合から予想されるよりは、ずっとよい。鮮明で、読むのに支障はない。

さて、『臥遊奇談』所載の原話と比較すると、「耳なし芳一のはなし」は構想の細かいところまで、かなり忠実に原話にしたがっていることが知られる。

そうした中で留意されるもっともおおきな違いは、芳一が平家の亡霊に呼ばれて平曲を語っていると察知した時の、阿弥陀寺の和尚の反応だ。

両者の反応の部分を並記する（傍線筆者）。

臥・汝、連夜彼地に至らば、恐らくは陽気陰気に圧れて命を害するに及ぶべし。

耳・二どと亡者の申すことをきけば、そなたの身はついには八つ裂きに会うてしもうぞよ。いや、いずれ遅かれ早かれ、その身はとり殺さるるにきまっておる。

”芳一ばなし”から「耳なし芳一のはなし」へ

結果として死に至るであろうと和尚が指摘している点は共通するが、亡霊が積極的に危害を加えると判断しているかどうかという点で、両者は決定的に違っている。

「八つ裂き」云々は、じつは八雲の発想による改変だった。『臥遊奇談』の「陽気陰気」を、彼が増幅拡大して解釈したのだ。

八雲の曾孫、小泉凡氏よれば（小泉八雲と「耳なし芳一」赤間神宮叢書15 平成16・4）、八雲は日本語は読めなかったので、夫人のセツが『臥遊奇談』を読み、自分のことばで、わかりやすく八雲に話して聞かせたのだという。凡氏はこれを、「再話文学」と呼んでいる。

『臥遊奇談』がこうした方法によって取材されたものならば、「八つ裂き」云々は、セツの解釈である可能性もあり得るとしななければならない。

しかしここでは便宜上、その点も含めて八雲的屈折だととらえておく。

## 9 断絶した近世

八雲的屈折は、彼の内なる文化のあらわれにほかなるまい。

そうした八雲の解釈を可能にしたのは、中古、中世と肌合いを異にする近世の文化であった。

『臥遊奇談』もそのひとつなのだが、近世には多くの怪異小説が誕生した。文学作品だけではない。演劇にも絵画にも妖怪変化がも

てはやされ、一種独特な文化現象を生んだ。そうした中で、亡霊への認識も、大きく変化しようだ。

近世的屈折と、それを受けた八雲的屈折との競合。それが「耳なし芳一のはなし」であった。

## 10 亡霊の怒り

亡霊が芳一の耳をもぎ取ったのは、彼が裏切ったからだ。亡霊が芳一の語りを聞こうとした理由は今ひとつわからないけれども、「さるやんごとないお方」の赤間滞在中、芳一が彼等の求めに応じていれば、耳を取られることもなく、「じゅうぶんなる礼物を」受け取るはずであった。

芳一が「耳なし」になったのは、無知でお節介な和尚の、あさはかな処置のせいだった。

## 11 “芳一ばなし”から「耳なし芳一のはなし」へ

芳一が亡霊の恩返しを受けて、「耳あり」のまま平曲の名人として有名になったり裕福になったりしたのは、物語としてのインパクトが弱い。単なる伝統的な亡霊の報恩譚にすぎず、おもしろくもおかしくもない。

怪異譚好みの時代の風潮を反映させて、亡霊に耳を引きちぎられたことにする。これがどうやら、いわゆる“芳一ばなし”の共通認識だったようだ。

末尾の表でみられるように、『曾呂利物語』以下の類話を検すると、亡霊に取り入れた部位は、耳↓左耳↓両耳と、時代が下るにしたがって次第に拡大している。これに連動するかのように、耳を取られた代償も、郷里に帰って長生きした↓人々から異名で呼ばれた↓亡霊との縁が切れた↓琵琶の名手として有名になったと、変化している。

変化したのは部位や代償だけではない。祟りをなす肝心の亡霊も変化した。

すなわち、『曾呂利物語』では単に琵琶法師に思いを寄せる尼であった。これが、『宿直草』で『平家物語』と結びついて小宰相となり、舞台も赤間に転ずる。しかし、一の谷から屋島に向かう途中で入水した小宰相の霊を赤間で登場させるのは不自然だ。そこで『御加厚化粧』では、壇浦で入水した二位尼の霊となる。この段階で、寺の名も阿弥陀寺と絞り込まれる。

ここまでは、霊の主も琵琶法師を迎えに来たのも女だ。これが『臥遊奇談』になると、大きくかたちを変える。二位尼はシテからワキに回って、亡霊の主は安徳帝となる。迎えに来たのも、女ではなくて武士になる。

要するに、一連の、いわゆる「芳一ばなし」は『臥遊奇談』に向かって成長しているのだ。

その一方に、変わっていない点がある。主人公の名前だ。ウインチ(うん市)↓ダンイチ(団都)↓ツルイチ(鶴都)↓ホウイチ(芳

一)と、終始「イチ」がついている。

ここで想起されるのが、琵琶法師の名前に「一」を付けたことで流派名となった一方流いちたうりゅうの存在だ。

いわゆる「芳一ばなし」の背後には、一方流の存在が見え隠れしている。これはあるいは、一方流の琵琶法師たちが、自派の宣伝のために亡霊に一役買わせたCMではなかったのか。これはその痕跡ではないのか。いささか短絡的ではあるが、そのように思えてならない。

それともあれ、『臥遊奇談』巻二「琵琶秘曲泣幽霊」に接して血の中にある亡霊への思いが呼び覚まされた小泉八雲は、それららの世界に引き込んだ。八雲が原話に心を動かされたのは、ひとえに、芳一が亡霊に八つ裂きにされるとの解釈を可能にする余地があったからだろう。

ヘルン文庫には『宿直草』も収まっている。八雲がこれに接していた可能性はある。しかし、小宰相や使者の女房の霊からでは八つ裂きのイメージは浮かんでこない。「耳なし芳一のはなし」は、『宿直草』からでは立ち上がってこないのだ。

「芳一ばなし」から「耳なし芳一のはなし」へ。異文化の融合に際してしばしばつまとう誤解や錯覚をはらみつつ、それをエネルギーとして形成された作品、それがどうやら、「耳なし芳一のはなし」であった。

野次馬は一人合点して、本を閉じる。

